

# 令和5年度 少年の塔慰霊祭

期日：令和5年9月23日（土）



「少年の塔慰霊祭」は、「上伊那各地より満蒙開拓青少年義勇軍として満州に渡り、再び祖国の地を踏むことのできなかつた青少年の御霊を慰霊し、永遠の平和を祈念する」趣旨で、公益社団法人上伊那教育会の平和教育研修事業として毎年行われています。

慰霊祭に先立って行われた整備作業により整えられ厳かに行うことができました。作業にご参加いただいた先生方、ありがとうございました。

今年度の慰霊祭は、4年ぶりに一般の方にも参加者を募り、正副会長をはじめとする上伊那教育会役員を含む42名で執り行うことができました。

また、慰霊祭の中で、平和研修として元上伊那教育会長の矢澤静二先生よりお話をいただきました。（当日配布資料を載せてあります。ご覧ください）

## 追悼の言葉

太平洋戦争終結から、七十八年の歳月が過ぎました。王道楽土の理想に燃え、満蒙開拓青少年義勇軍として中国大陸に渡り、志半ばにして荒野に散った九十余名の若い御霊に、謹んで哀悼の誠を捧げます。

「満州は日本の生命線」と言われ、昭和七年に満州国が誕生しました。計り知れない資源と広大で未開の原野を開拓して「王道楽土」を築き、国内の人口・経済問題を解決すると同時に、軍事的にも北の守りを固めようとする国策の一環として計画された満蒙開拓。貴殿達 義勇軍もその一翼を担わされたのでした。

国家総動員体制が強化されていく中、上伊那教育会も教師自身率先して大陸に渡り、また上伊那義勇軍父兄会を組織するなど、国策として積極的に取り組み、昭和十二年から終戦までに郡下で約五百名を越える義勇軍を送り出しました。そして、昭和二十年八月九日 対日戦線布告したソ連軍が次々に大陸を南下、「王道楽土・五族協和」の夢は一瞬にして消え去り、関東軍の武装解除は極度の大混乱暗澹たる状況の中、貴殿達多くの義勇軍が若き命を落としていくこととなりました。

教えられるままに何の疑問も持たず純心に生き、そして若き命を異境の地に散らせた九十余名の貴殿達。台上に立つ少年の像は胸を張り、遙か遠くの何を見据えているのでしょうか。今、日本や世界の状況に目をやれば、いのちの尊さや平和に対する危機感を抱かざるを得ない出来事も少なくありません。

しかし、私たちは、今ここに頭を垂れ、過ぎ去りし日々を思いを寄せると同時に、戦後七十八年を過ぎてなお、この上伊那教育会の負の遺産を決して風化させることなく、真摯に学び、永久平和への努力を改めて誓います。二度と、同じ過ちは繰り返しません。

九十余名の若き御霊よ、安らかにお眠りください。

令和五年九月二十三日

公益社団法人上伊那教育会

会長 原 浩範



追悼の言葉  
原 浩範 会長

## 慰霊祭の様子



平和研修会  
矢澤静二 元会長



参列者全員で  
黙祷、焼香をしました



矢澤先生の話をお聴く  
参列者



今年度は一般の方も十二名が  
参列していただきました

＝上伊那教育会平和教育研修会・『少年の塔』慰霊祭に寄せて＝

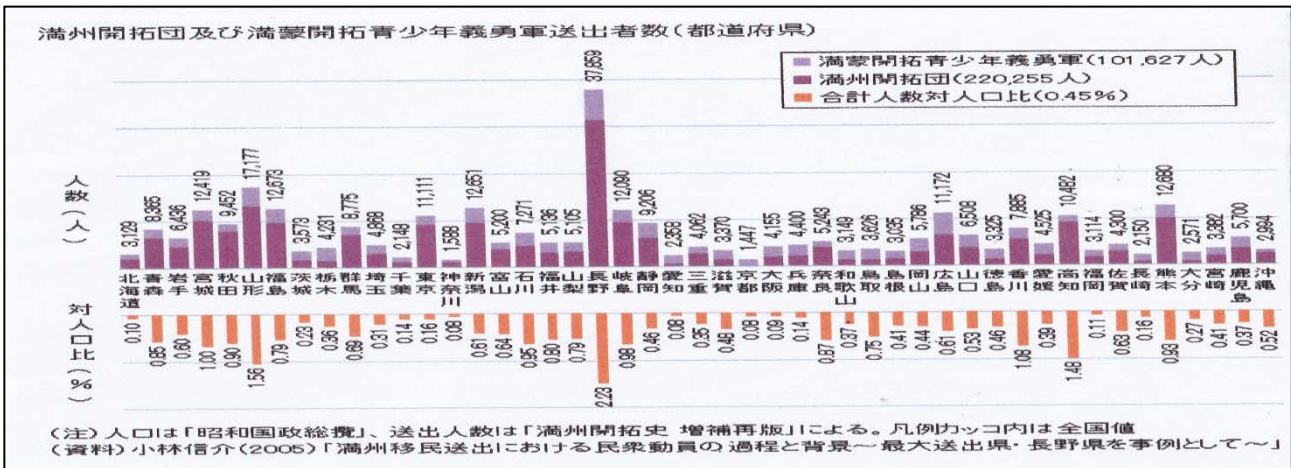
矢澤静二

一 満州事変から敗戦まで

～金融恐慌(昭2) 大霜害(昭2) 世界恐慌(昭4) 農業恐慌(昭5)～

- ① 昭和6年9月…満州事変←関東軍による鉄道爆破事件
- ② 昭和7年3月…満州国建国＝日本の傀儡(かいらい)＝あやつり人形国家
- ③ 昭和7年10月…第一次試験(武装)移民始まる…関東軍主導 満州移民のはじまり
- ④ 昭和11年5月…国策「満州農業移民20ヶ年100万戸送出計画」
- ⑤ 昭12年7/7…日中戦争勃発
- ⑥ 昭和13年1月…満蒙開拓青少年義勇軍の制度確立・派遣開始
- ⑦ 昭和16年12/8…太平洋戦争開戦
- ⑧ 昭和20年8/9…ソ連軍が満州へ侵攻
- ★開拓団・義勇軍<ソ連侵攻後、悲惨な逃避行⇒收容所生活>★
- ⑨ 昭和20年8/15…終戦の詔勅
- ⑩ 昭和20年9/2…無条件降伏調印・敗戦

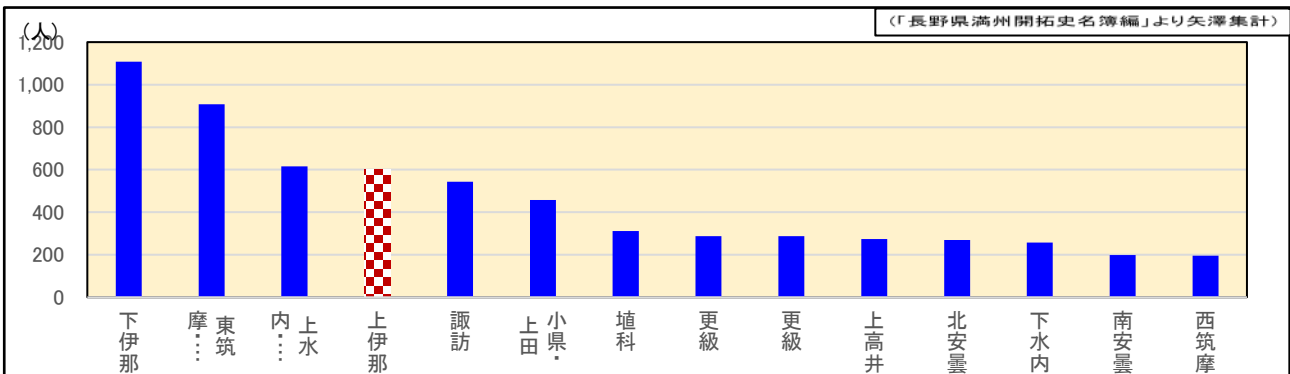
二 満蒙開拓青少年義勇軍の始まり



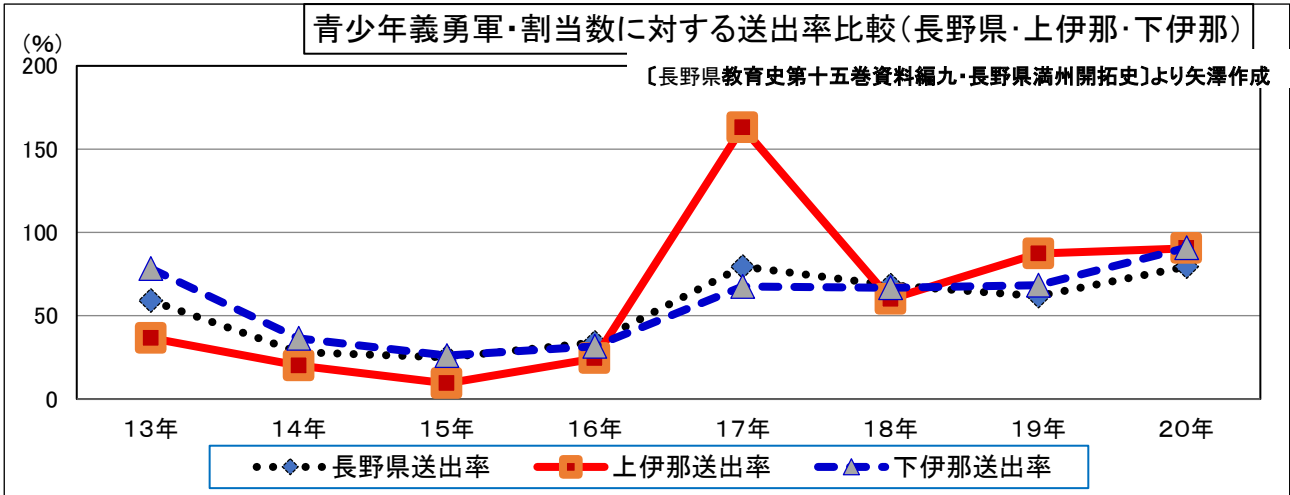
- 1 昭和9年…「青少年試験(武装)移民」送出開始 ⇒ 純真な青少年こそ満州開拓に適す
- 2 昭和13年…「満蒙開拓青少年義勇軍募集要綱」…義勇軍制度が正式に開始  
\*かぞえ16(満15)歳～19(満18)歳＝現在の中学3年生～高校3年生
- 3 《満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所》茨城県:期間(約2ヶ月～3ヶ月)
- 4 満州で、現地訓練3年間① 大訓練所訓練1年間②小訓練所訓練2年間
- 5 集団移民(義勇隊開拓団)として独立＝政府の補助金を受け、建国農民となり一戸当たり10～20町歩の地主
- 6 満蒙開拓青少年義勇軍送出の手順  
①国が県に割当 ⇒②県が市町村に割当 ⇒③市町村が小学校に依頼

長野県郡市別・満蒙開拓青少年義勇軍送出数(昭和13～20年)

全国 86,530人、長野県 6,595人、上伊那 597人



二 『上伊那の青少年義勇軍送出率が、昭和17年以後急増したのはなぜか』



1 「二・四(教員赤化)事件(昭和8年)」の影響<全県的な問題>

◆「治安維持法」違反で、非常に多数の教員が検挙された事件。

◇“教育県長野”未曾有の名誉失墜事件として、県知事・県官僚・教育関係者(信濃教育会・各郡市教育会)が長野県教育の汚名を挽回するために尽力。

2 「上伊那教育会事件(昭和16年)」の影響<上伊那独自の問題>

◆上伊那教育会会長(伊藤泰輔:義勇軍送出に消極的) ⇔ 副会長(松沢平一)及び教育会役員等(表の氏名が斜線)の多数(義勇軍送出に積極的)が激しく対立 ⇒ 上伊那の教育界の混乱の責任を問われ、正・副会長がともに更迭された事件

	伊那小	赤穂小	東春近小	高遠小	伊那富小	中箕輪小
校長	伊藤 泰輔	松澤 平一	三澤 孔文	仁科 岡雄	小松 清志	宮坂 完一
主席訓導	柄山 岩雄	竹腰清一郎	小林 忠雄	小松 茂喜	黒河内 浩	松村 悟朗
	南箕輪小	朝日小	七久保小	伊那里小	美篠小	
校長	大槻 要助	松澤修一郎	内田 暲	丸山 清人	小島 守人	

◇二・四事件+上伊那教育会事件=上伊那教育会二重の汚名

\*『上伊那教育会收拾の責任と県下教育界に対しての信を取り戻す』ために。

(3) 青少年義勇軍送出に熱心な教員のすすめ

① 義勇軍送出のために、上伊那教育会として熱心な取組

《仁科》…上伊那教育会会長 《野村》…上伊那教育会副会長

② 熱心な教員の代表例

《小林忠雄》…東春近国民学校教頭 《戸田正廣》…東春近国民学校高等科2年担任

◆戦時中禁止の修学旅行の代わりに、内原訓練所での生徒の宿泊訓練を要請

⇒ 内原訓練所宿泊体験実現(4泊5日、高等科2年 41名参加) ◆17年度…東春近国民学校だけで義勇軍19名送出(割当3人) ◆戸田は、翌18年…内原訓練所義勇軍指導員

三 日本政府・大本営による満蒙開拓団・義勇軍への棄民政策

※ 昭和20年5月~7月~8月15日……開拓団の召集拡大18(17)歳~45歳男性。

★ 残されたのは少数の男性(高齢者中心)、女性、子どもだけ

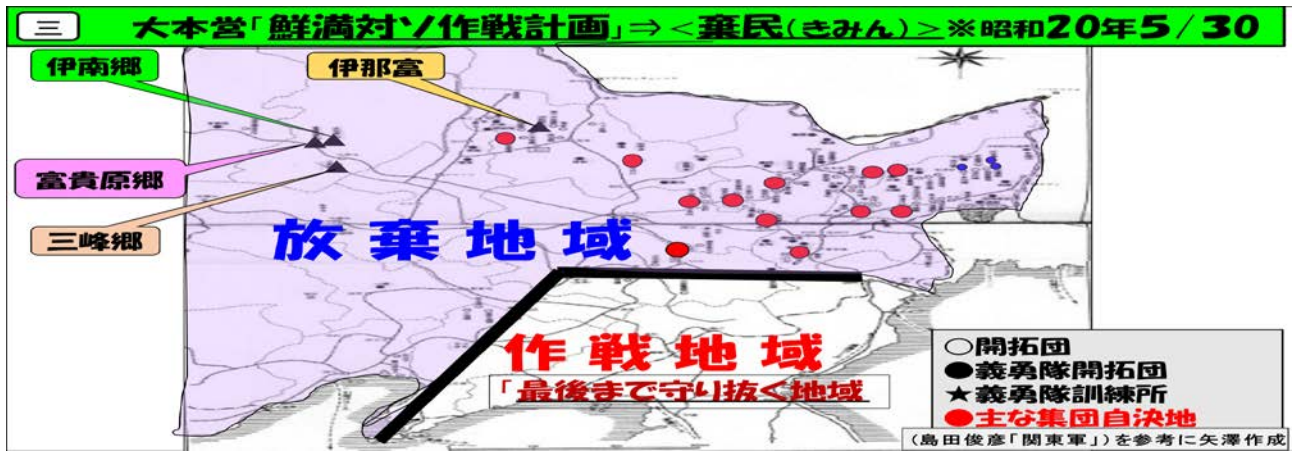
① 8/9…ソ連軍が満州へ進攻 \* \* \* 開拓団は死の逃避行へ、集団自決等、凄惨な状況に

③ 8/14…日本政府「ポツダム宣言受諾に関する在外現地機関への指示」

『居留民は出来る限り現地(満州及び朝鮮)に定着の方針をとる』

④ 8/15…ポツダム宣言受諾・終戦

⑤ 8/19…関東軍司令官が開拓団へ命令「開拓団は現場を維持せよ」



#### 四 満蒙開拓民・青少年義勇軍…生き地獄の結末

- 1 開拓団未帰還(死者＋残留者＋不明者)率…全国37%/長野県55%
- 2 上伊那の満蒙開拓青少年義勇軍の犠牲者…91人〈『少年の塔』裏面に氏名刻字〉

#### 五 生還した満蒙開拓青少年義勇軍体験者の言葉

##### ◆義勇軍体験者：伊澤巖

「青少年義勇隊の経験から、『青年は銃をとるな』を信念として持ち続けている。親父は、自分の義勇軍応募に猛反対だった。14歳の自分がお国のために義勇軍に入るのが当たり前だと狂信していたのは、学校で受けた教育の影響だ。＊自分は、心の底から、神国日本のため天皇陛下のために義勇軍に入らなければと信じていた。それがお国のために生きる自分の務めだと信じさせたのは学校教育と先生だった。

＊逃避行で歩いた道、子どもが川に流されている光景、死体がゴロゴロしていた光景も忘れられない。

＊満州へ行けば10町歩の土地を持った大規模農民も夢ではない」と送り出されたが、命からがら満州から持ち帰ったものは、出征前に近所のおばさんからもらったお守り一つだけだった。

＊日本人は、満州で他人の土地を奪った。命も奪った。戦争の悲惨さは口では言いようがない。戦争の残酷さ・悲惨さが余りにも重過ぎて、人に話しても分かってもらえないと思う。だから、戦争で体験したことを、滅多に人には話したことがない」

##### ◆義勇軍体験者：北原和夫

「昭和18年義勇軍に入った。最後は希望かも知れませんが、やはり当時の教育でしょうね。(略)赤穂小の教育会長 仁科先生。伊那小の副会長 野村先生。先生方の指導が、多くの青少年の心をかき立て、そして決心させたということを感じるわけです」

#### 五 満蒙開拓青少年義勇軍を送り出した教員の言葉

##### ◆上伊那教育会副会長 野村篤恵

「この義勇軍こそ年少にして渡満し五族を指導して他日満州国の中軸として立つ最も貴重なる要素であって、満州問題解決の鍵が全く此処にあると言ってよい」

##### ◆義勇軍中隊長体験 宮下慶正

「14や15の子ども達が、「俺は満州に行くんだ」と言って、親の言うことも聞きません。先生がほとんど勧めたわけですが、親はほとんど反対だった。それを押し切って、印鑑を盗み出しても志願をしていったのはいったい何故だったか」

##### ◆当時青年学校教師 三澤豊

「満蒙開拓青少年義勇軍に行けと毎日担任から言われている事、親は賛成していない、父は身体が不自由、母も病気がち、妹たちはまだ小さい等々、その子は義勇軍に応募できない自分の立場を精一杯私に打ち明けようとした。私は、「満州は日本の生命線である。君等のような若者がこの重責を負わなくてどうする」と得意になってしゃべった。その子は義勇軍行き

の承諾を学級担任に伝えた。その子は戦争が終わってもとうとう帰っては来なかった。墓石だけが建てられた」

#### ◆義勇軍幹部体験：梅垣英人

「諏訪方面から来た犠牲者のお父さん。私の家の玄関へ入るやいなや、『うちの小僧のような病気一つしたことのない丈夫のやつを何で殺してしまったのだ』その時のお父さんの表情と顔と姿がありありと未だに頭から離れません」

### 六 終戦後の義勇軍引揚者に対する上伊那教育会の動き

- 1 昭和21年7月…上伊那教育会により義勇軍救援措置として「義勇軍引き上げ援助金募集に関する通知」
- 2 昭和21年7/23～11/30…上伊那教育会が、青少年義勇軍引き上げ者に対する、各学校に辰野駅での出迎え勤務要請。昼間(7:00～19:00) 夜間(18:30～翌朝7:00)
- 3 青少年義勇軍引き上げ者の再就職斡旋…上伊那教育会事務所で雇用(梅垣英人、小松恭二、北原和夫)
- 4 昭和36年5月…上伊那教育会・上伊那地区義勇軍遺族会が、衆・参両院議長へ「満蒙開拓青少年義勇軍並びに学徒隊員遺族援護に関する請願書」提出

### 七 『少年の塔』の建立

- 1 昭和34年2月…義勇軍遺族会より、上伊那教育会に「平和像」建設の申し入れ。
- 2 昭和35年～…上伊那教育改造建設について具体的に取り組み開始。

#### ◆募金活動開始…「趣意書」作成配布

- ① 発起者…上伊那教育会、上伊那市町村会
- ② 構 想…「平和を象徴する青少年の立像」ブロンズ台付き
- ③ 像制作…日展作家 瀬戸団治(辰野町出身)
- ④ 像の命名…『少年の塔』に決定。「この塔を建て、永遠の平和を祈願するものである」
- ⑤ 建設場所…伊那市伊那公園
- ⑥ 寄付金…寄付者：約1万5,000人、金額：約90万円（建設費約60万円、30万円を遺族に贈った）

- 3 昭和36年4月18日…『少年の塔』除幕式

○青山教育会長…「この『少年の塔』は、犠牲者の霊を慰めるとともに、二度とこんな悲劇は繰り返さないという平和祈願の象徴にもなる」

○瀬戸団治…「私は今までにいくつとなくこうした像を作ったが、この像ほど皆さんに感激され、喜ばれた像は外にありません」と涙の中に語った。

※ 以後、毎年4月、遺族会主催で慰霊祭を行ってきたが、昭和50年代後半、遺族会の皆さんが亡くなったり高齢化したりして減少したことに伴い遺族会が解散した。それ以後は、上伊那教育会が主催して『少年の塔』慰霊祭として継続してきている。

- 4 『少年の塔』の隣に並ぶ青少年義勇軍慰霊碑について

◇第2次曙義勇隊開拓団招魂碑(長野県全区出身者)…昭和40年建立

◇第4次西海浪竜川義勇隊開拓団招魂碑「吾らの魂を永遠に此処に刻む」(上・下伊那、諏訪、南・北安曇郡出身者—上伊那出身宮下慶正氏が2代目中隊長)…昭和46年初代中隊長横川氏宅に建立 ⇒ 平成5年伊那公園に移転。

\*「満蒙開拓青少年義勇軍という世界史上に類例のない少年による武装移民」

\*「満蒙開拓青少年義勇軍の悲劇の本質は、少年たちが中国人への加害者であると同時に被害者でもあり、さらにいえば、加害者兼被害者に強制的に仕立てられたところにあるのだ」

\*「青少年義勇軍の少年たちは、日本国家の政策によって、中国人への加害者に仕立てられ、そのことによって中国人よりの被害者となった存在なのだ。ということは、換言すれば青少年義勇軍は、中国人に関して<加害者にして被害者>たらしめられたという点で<日本国家の被害者>である—ということにほかならない。そして青少年義勇軍の悲劇の本質は、そのような<日本国家の被害者>に、おとなならばまだしも、その心身を社会の力で守らなければならぬはずの少年が供せられたという、まさにその点にあるとしなくてはならない」

上 笙一郎『満蒙開拓青少年義勇軍』より